



Title	「軽み」と“くつろぎ”：俳諧の座との関係において
Author(s)	八亀, 師勝
Citation	語文. 1973, 31, p. 60-67
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68611
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「輕み」と「くつろぎ」

— 俳諧の座との関係において —

八 龜 師 勝

貞門の時代から、俳論・俳文・書簡・発句・付句などにおいて、「くつろぎ」という語が屢々用いられている。その用例を検するに、きわめて広い範囲にわたっていることが認められる。いまそのうちで俳論に関係あるものを分類してみると、次の五つに要約することが可能である。

- 一、連歌・俳諧が共同制作の文学たる所以を座との関係で説く場合
- 二、和歌・連歌と俳諧との相異を明らかにせんとする場合^(注1)
- 三、漢詩文の語句を載入れることやその語句の倂屈な語調から脱却することを説く場合^(注2)
- 四、「さび」を「変質」として把えるならば、特に支考の俳論のなかで、その解説のために用いられる場合^(注3)
- 五、「輕み」が明確な理念としてまだ確立されていない段階においてその方向を示す場合、または、「輕み」の確立後も初心者に説く場合

これらのことから明らかなように、この語の概念が非常に曖昧で漠然としていることは否めない。従って、ある特定の理念を有つ、自立した俳論用語としての位置を与えることは不可能であると考へねばならない。しかし同時に、この語が何ら特別な意味を有たない、

ごくありふれたものでないことも否めない事実であつて、この語の背後には、俳諧精神の本質的な問題が秘められているように思われるのである。

要するに、「くつろぎ」なる語は、俳諧の本質論に基づきながら、他の俳論用語や俳諧理念を説明し、理會せしめるための、補助的・脇役的な機能を果しているものである、と言ひ得よう。

本稿においては、四段活用の連用形を用いて「くつろぎ」と称しているものの、右のような前提のあることを最初にことわっておかねばならない。

なお、注の2・3にも記したように、「くつろぎ」の用例のうち二・三・四については既に別に論じたことがあるので、本稿では一と五とを中心にして考察を進めてゆくこととする。

貞門時代に用いられている「くつろぎ」の例は、伝統的な和歌・連歌の有している窮屈さから脱れるところに俳諧の特質があることを明らかにするためのものであつたと考へられる。

俳諧は連歌座心つまりたるをくつろげん慰みに古人のせられし

かば云々(天水抄、傍点筆者、以下同じ)

これは、俳諧が、連歌に比して、自由で拘束性の少ないものであるべきことを述べているのであって、ともに座における共同制作の文学であるとはいえ、後者が和歌の伝統を継承した純正なものであるがゆえの窮屈さを有っているのに対して、前者は自由のびのびと行われるべきものであり、そこにこそ俳諧たる所以のあることを主張しているのである。俳諧を慰みであると規定することは、連歌との相異を明らかにするためにしばしば為されるところであるが、それと同じ基盤の上に立って、「くつろぎ」の語が用いられているのである。^(注4)

ついで、『御傘』の「寺」の項の解説の一部に、

釣鐘は元來尺教より出たれ共、在郷にも、又城塚にも、社頭にも、用心のため、時を知らんためつり置ゆへに、新式にも尺教の具に不入。然は、尺教にハあらざるとつよくおもひすましてすれば、連誹く、つろぎで興出来もの也。指合ハ当座の諍論をやめんがためとあれば、たとひ定りたるさし合なり共、少々事ハきはぬがよきを云々

と記されている。釈教の語句は、連俳においては特別な心得を要するけやけきものであり、これにはいろんな制約が加えられるのであるが、それを承知の上で、実際に制作するに当っては、あまり神経質に拘泥すべきでないことを説いているのである。形式的に式目に拘泥しすぎるこの弊害を、連歌・俳諧の両方にわたって説くときに、「くつろぎ」なる語を用いていることが理會されるのである。

このように、連歌と俳諧との相異を述べるときに「くつろぎ」を用いる『天水抄』の文言とを併せ考えると、共同制作の文学、それ

も特に俳諧においては、「くつろぎ」の精神が不可欠であることを説いていると言つてよいであろう。しかも、注目すべきは右の解説を為すに当って、「座」「会」などの語を用いて、連衆相互の有機的なつながりを重視していることである。そのことは、前掲の資料のなかにも、「座心」(天水抄)、「当座」(御傘)とある通りであるし、さらに、『御傘』の同じ「寺」の項に、

又、無言に寺の打越に鐘とすべからずとあり。是もさやうにいひをしゆれば、未練・初心の人は気味わるく、あやぶみて、付度句をえ付ぬ故に、連誹すくみて、会もをぞく成なり。

とか、

あまりこまかなるせんさくは、俳諧しにくくなりて、座の興すくなきものなり。

などと記していることから証し得よう。

これらはいずれも、連衆の心理的な緊張感が俳諧の制作過程や作品そのものに悪影響を及ぼすことを恐れ、それを避けて、座の興を保つために、式目をゆるやかにしようとする姿勢のあらわれである。その心理的な側面が「くつろぎ」の精神であり、これが貞門における「くつろぎ」の概念であったと考えられるのである。

貞門の俳論における、右のような「くつろぎ」の精神は、談林の俳論には全くうけつがれず、蕉門以後になって再びさかんにとりあげられるようになってくる。^(注5)

じだらくに寝れば涼しき夕哉

さるみの撰の時、一句の入集を願ひて、数句吟じ来れど取べきなし。一夕先師の、いざくつろぎ給へ、我も臥なんとの給ふに、御ゆるし候へ、じだらくに居れば涼しく待ると申。先師曰、是

は句也、と。今の句につくりて入集せよとの給ひけり。(去来抄)

これは、佳句を泳んで、入集の榮に浴せうとする意識が働くと、それがかえって妨げとなって佳句ができないことを教えているのである。句を詠むときの心理状態をいかに保つべきかということや、芭蕉が作者の心理状態をうまくほぐしてゆく過程などがうかがわれて興味深い資料である。これは発句の場合であるが、連句の場合にも次のような例がある。

今の世にて口利く大夫のうちに、これほど道成寺をこなすべき人あるまじく覚ゆる也。其かたちはともあれ、一体がわがものになり済してゐる也。外のものをするとかはる事なし。故にくつろぎ有て面白し。道成寺の場かず専助ほどつとめし者ありじ。たれにてもあれ、スワ道成寺也と心のあらたまらぬ者ありじ。是く、つろぎを失ふ処なるべしと申されしと也。しからば、俳席にても、はいかいに心あらたまらず、く、つろぎありたきものなりとかたられし。(はいかい袋)

「道成寺」という大きな演目を演ずるとき、あらたまつた気持になるあまりにくつろぎを失い、演者は充分にこなすことができず、従つて、観客も充分に楽しむことができない結果を招きやすい危険性のあることを指摘し、それをそのまま俳席にもあてはめて、俳諧師が過度の緊張感を持つことを戒しめんとしているのである。同時に「場かずをとめる」とあるから、いわゆる「座効をつむ」ことが「くつろぎ」を得るひとつの要件であることも理會される。

右の資料は、かなり時代の下つたものであるが、「くつろぎ」の精神がその根柢になければならないという点については、「くつろ

ぎ」の語こそ用いてはいないが、芭蕉が「妙句に一座を屈しさせんよりは、麈句にその座の興を調へよ」(山中問答)と語ったり、恋の句をはじめとして式目には寛大な態度を示したり、あるいは、氣・拍子・機嫌に乗せて詠むべきことを説いたりすることと同じような考え方が認められるであろう。

二

さて、右のような過程を経てきた「くつろぎ」は、芭蕉の晩年の俳諧理念であるところの「軽み」を説くに当たっても、一つの役割を演じていると思われる。

「軽み」という語が既に元禄三年ごろから用いられていて、このころから芭蕉の頭の中では、俳諧の新しい方向が自覚されていたのであるが、これが熱心に説かれるのは、元禄五年以降(それも殊に最晩年の七年)であることは、周知の通りである。(注6)以下、それを前提として、「軽み」と「くつろぎ」との連関を推測せしめる資料をいくつか掲げることとする。

まず、元禄三年十二月の句空宛書簡のなかで、芭蕉は次のように記している。

何とぞ風雅のたすけにもなり、且は道建立の心にて、言葉つまりたる時をく、つろげる味に而、折々集を出し候処に、三年昔の風雅只今出し候半は、跡矢を射るごとくなる無念而已に候。

これは、芭蕉の「くつろぎ」の用例のうち、年代がはっきりしているもののなかでは最も古いものであって、前掲の『去来抄』の例と時期的にはほぼ同じころである。ところで、「三年昔の風雅」が具体的に何を指しているかは明らかでない。「三年者」が正確に三年

前を指しているのではなく、単に古風を意味しているだけであるかも知れないからである。しかし、ごく素直に解すれば、漢詩文口調の侘屈さから虚脱して、理念としての「わび」「さび」や付合の手法としての「にほひ」を完成させる時期を指しているということにならうか。そうであるとすると、「くつろぎ」と「軽み」との関係が非常に濃厚なものとなるのであるが、前述の理由でその結論を急ぐことが危険であるとするならば、少くとも、詞の侘屈・晦渋さから脱れることや俳諧の停滞を破り、新味を追求することが「くつろぎ」と連関を有している事実と、元禄三年冬に「くつろぎ」を用いている事実（これも厳密な言い方をすれば、当時までの折々の撰集の意図は「くつろぎ」のためであったと、元禄三年に自ら評価している事実）とを指摘するだけにとどめてもよい。

次に、元禄五年の去来宛芭蕉書簡では、次のようになってい
一、此方、俳諧之体、屋敷町・裏屋・背戸屋・辻番・寺方まで
点取はやり候。尤点者共之為には悦にて可有御座候へ共、さて
く浅ましくなり下り候。中く新しみなど、かろみの詮儀お
もひもよらず、随分耳に立事、むつかしき手帳をこしらへ、磔
・獄門巻く／＼に云散らし、あるは古き姿に手おもく、句作一円
きかれぬ事にて御座候。

このなかには、いろいろな要素が混在している。つまり、俳諧の極端な卑俗化の問題、趣向や句作の問題、口調や用語の問題、そして新古の論などである。このうち、卑俗化の問題を除いては、句空宛書簡ときわめて近い立場から論じていると考えてよいであろう。句空宛のものでは「くつろぎ」となっていたが、ここでは「かろみ」となっているということは、この両語の間に何らかの相関関係のある

ことを推測せしめる一つの資料とはなり得るであろう。

ついで、『俳諧問答』では、

師の曰く、当時諸門弟並ニ他門共ニ俳諧體ニして、疊の上ニ座し、釘かすがいを以てかたくしめたるがごとし。これ名人のあそぶ所にあらず。(中略)名人ハあやぶき所ニあそぶ。俳諧かくのごとし。仕損ずまじき心、あくまであり。是レ下手の心ニして上手の腸にあらず。

という、有名なことばが記されている。この「俳諧體ニして、……かたくしめたるがごとし」や「仕損ずまじき心」というのは、冒頭に座のくつろぎのことを述べたところからも明らかのように、「くつろぎ」とは全く逆の状態である。ここで言う「当時」というのがいつを指しているのかも分明ではないが、許六の記するところによれば芭蕉は、元禄六年の三月尽日から四月初めまで、江戸の許六宅に滞留して、昼夜俳談を語ったとあるから、このときのことであるとすると、前掲の去来宛書簡の翌年ということになる。この時期は「軽み」の理念がすでに明確な形をとりはじめていたのであるから、やはり、「軽み」と「くつろぎ」との連関を座の観点から推測する資料となすことが可能であろう。

また、元禄六年夏、芭蕉は「ほととぎす声横たふや水の上」という句を詠んでいるが、初案の「一声の江に横たふやほととぎす」といづれを採るべきであるかを門人にもたずねたことがあるが、その間の消息を次のように記している。

水光接「天白露横」江の字、横、句眼なるべしや。ふたつの作いずれにやと推敲難「定処、水沼氏沾徳と云者吊来れるに、かれ物定のはかせとなれと、両句評を乞。沾曰、横江の句文に對して

考之時ハ、句量尤もいみじかるべければ、江の字抜て、水の上とくつろげたるにはひよろしき方ニおもひ付べきの条申出候。

(荆口宛芭蕉書簡、元禄6・4・29)

江の字を抜いて水の上とくつろげた理由は、沾徳の判断によれば、「句量尤もいみじかるべければ」であったとい^(注8)のである。句量いみじき状態は、句体の重くるしいことを指すのであるから、それをくつろげることは、「軽み」を希求するところから出ていると解してよいであろう。

さらに、支考は『十論為弁抄』で、次のように述べている。

さあと案じ込む一念の気をいさゝかも胸より下におろさず、目に見え、耳に聞ゆるものをとらへて、およそ十句も廿句も、たとへば五十韻も百韻も、初念の調子を失ふべからず。されど、五七句の間にておもげて理味に落入る時あり。其時はすみやかにやめて、酒にも茶にも其気を転ずべし。とかくに俳諧のしつむ日は、その句をかざりにしまふべき也、

俳諧の座において、連衆がうまく拍手に乗って詠むことができない状態に陥った場合には、すみやかに興行を中止すべきことを説いているのである。その際「おもげる」「しつむ」などの語を用いているのであるが、これも明らかに「軽み」に反するもので、「くつろぎ」を求める所以がここにあったことは前述の通りである。しかも「理味」については、杉風の塵時宛書簡に照してみると、まさしく「軽み」との関係で説かれていることばであることがわかるのである。

さらに、時代はかなり下ることになるが、曲斎は『七部婆心録』において、

延宝・天和の間は翁も工夫最中にて未だ開けず。冬の日に漸う定まりければ、作未だ頑也。夫より段々に和らぎて、猿みに全く調ひ、炭俵に軽み頭れたれば、弥々軽からむこそ、正風の本意なれ。

と記している。それによれば、『冬の日』に残っていた佝屈な口調から、和らぐようになり、それを経ることによって正風俳諧は『猿養』で完成し、『炭俵』の「軽み」に移行してきたということになっている。この「和らぎ」は、注4でも触れたように、「くつろぎ」とはきわめて近い語義を有するものであった。従って、「くつろぎ」は「軽み」への移行の過程において、一つの重要な働きを有していたと推定されるのである。

最後に、支考の「今宵賦」を掲げておく。これは、「夏の夜や崩て明し冷し物」を発句とする歌仙(『続猿養』所収)の前書となっているものである。

たま／＼かたりなせる人さへ、さらに人を興せしめむとにあらねば、あながちに弁のたくみをもとめず、唯萍の水にしたがひ水の魚をすましむるたとへにぞ侍りける。(中略) その交のあはきものは、砂川の岸に小松をひたせるがごとし、深からねばすこからず。かつ味なうして人にあるゝなし。幾年なつかしかしかりし人／＼の、さしむきてわするゝににたれど、おのづからよろこべる色、人の顔にうかびて、おぼえず鶏啼て月もかたぶきける也。

このなかで用いられている比喩的な表現は、『別座鋪』序や去来の不玉宛論書などの「軽み」の比喩的表現と^(注10)きわめて近い類似性を示していることがわかる。それを念頭にして「交のあはきもの」とい

う文言を勘考すると、俳諧の座と「軽み」とが関連を有していることが理合せられるであろう。

三

以上、「くつろぎ」、「軽み」、俳諧の座に関する資料をいくつか引いてきたが、これらのことから、次のようなことが言えるのではないかと思われる。

一、「軽み」の風体が、『猿蓑』後の蕉風俳諧の進むべき方向として自覚されていながらも、まだおおよその輪郭を有つただけであつて、明確な理念としては確立されていない段階において、その方向を示すことばとして、「くつろぎ」なる語が用いられたのではないか。

二、その際、芭蕉は、共同制作の文学としての連歌・俳諧の特質と両者の相異とを、貞門時代の意識にもう一度立戻つて想起し、わび・さび・にほひとところで固定化し、情趣化しようとしている傾向を打破せんとしたのではないか。それが「くつろぎ」という語になつてあらわれているのではないか。

三、それは単に、新味を追求するということにとどまらず、『猿蓑』で一つの完成をみた蕉門俳諧が、出座した連衆に緊張感を持たせることになつてしまつてゐることに気づいた折の反省から来ていると考へてよいか。

この点については、既に横沢三郎氏が示唆しておられる。同氏は、芭蕉のにはひ附は、物附や心附よりも前句と後句との開きが大きく独自の世界を主張しつつ、しかも連けいを保とうとする故、一種の芸術的な緊張感を伴ふなり、と述べた後、

然るに「かるみ」の俳諧の代表的なものと目されてゐる「戻使」の附合をみるのに、さうした緊張感はむしろ虚脱して、なだらかにくつろぎが感ぜられるのである。（『俳諧の研究』一二〇頁）

と言われる。同氏は「軽み」と「くつろぎ」との関係を考察しておられるのではなく、「軽み」のなかに、なだらかな、くつろいだ感じがあることを述べるにとどめておられるが、両者に何らかのつながりのあることを示唆した論考として、私には教えられるところの多いものである。

四、「くつろぎ」なる、ごく日常的なことばで以て俳諧を説くことは初心者に対しては、その理會を助けるために有効であつたと思われる。「軽み」の理念が確立した後も、この語は、初心者むけの解説用語として用いられたと推定してよいか。

ただ、このことについても一言しておくならば、「くつろぎ」の精神が俳諧においては不可欠の要素であることを説くと、一方では、これだけがあればよいというふうな誤解される危険性が多分にあつたと思われる。去来宛の芭蕉書簡にある「浅ましくなり下」つた状態がそれである。『三冊子』に、

俳諧におもふ所あり。能書の物書るやうに行むとすれば、初心道をそこなふ所ありといへり。いかなる所ぞととへども、しかくともこたへ給はず、其後句を心得見るに、くつろぎ一位有。高く位に乗じて自由をふるはんと根ざしたる詞ならんか末弟の迷ひて道をおろそかにせん事を、なにかにつけて心にこめてつゝしみのことは也。

とあるが、「くつろぎ一位有」という文言は、高悟婦俗説や俗談平

話説の提示の方法と同じパターンで為されたものであろう。すなわち、一方では、「くつろぎ」の精神で詠まれた句も、高い位を有し得ることを説くことと併せて、他方では、一偏のみを信じて墮落してしまいやすい初心者の誤りを正そうとする意図のもとに為されたものであると考えられる。『俳諧問答』で言うところの、あやふき所にあそぶ名人とは、この二つの調和をうまく為し得た俳諧師の謂に他ならない。

俳論の性格上、それぞれの俳談のなされた時期が必ずしも明らかではないのであるが、管見に入った資料にもとづいて、「軽み」と「くつろぎ」との関係について、一つの仮説として卑見を述べた。本稿では、「くつろぎ」を他の俳論用語や俳諧理念の補助的な役割を担うものとして論を進めたのであるが、「くつろぎ」の精神そのものが俳諧においては高い位を占めるのではないかという考えを一方では持っている。そのことについては、他日を期したい。(昭和47・11・29)

(南山大学助教)

付記 本稿の要旨は、昭和47・11・24日に日本近世文学会秋季大会において口頭発表した。

(注1) 和歌・連歌に対して、俳諧が庶民にもわかりやすいものであることを主張するときにいわれるものであって、用語の自由化素材の拡大、趣向の卑俗化などと密接な連関を有する。

(注2) 談林調から脱却する一つ的手段として蕉門でも採用した漢詩文調との関連で用いられているものである。これは、漢詩文の世界や語句を俳諧に摂取するとき、音を訓に改めるとき(漢語を

和語に改めるとき)、語調のなだらかを保つべきことを説くとき、助詞「の」の機能を説くとき、などの広きにわたる。注1・2については、拙稿『くつろぎ考』(「アカデミア」第七十七集、昭和45・3)を参照されたい。

(注3) 栗山理一氏は「俳句本質論の批判」(『俳句批判』所収)において、「さび」を変質として規定される。これにきわめて近い発想をしているのが支考であって、明らかに「くつろぎ」は「さび」を説くための補助的な役割を担っている。この点については拙稿『くつろぎ考』(「アカデミア」第九十二集、昭和48・3発行)を参照されたい。

(注4) すでに旧稿において述べたことであるが、ここにあらためて記しておく。それは、「くつろぎ」と非常に近い語に「やはらぎ」があるということである。両語の使用例で重ならないのは、古今序の「男女の仲をやはらげ」を「男女の仲をもくつろげ」とはいわないことを唯一の例外とする、と云ってよい。『天水抄』においても、「俳諧も又連歌をやわらげれば、其徳連歌と同じと云事愚也。弥増の徳あなり」とあるがごとくである。なお、これもついでに述べておくと、この両語の融通性が最も自在であるのは支考の俳論である。

(注5) その理由については、いずれ稿を改めて論じたいと思うが一は、座に対する意識の変化である。連歌時代に成立し、貞門の俳諧において俳諧的な展開をみせた座の意識は、談林の俳諧になると明らかに一つの頓挫の時期を迎えるのである。座に対する意識が稀薄になれば、「くつろぎ」の精神が見失われてしまうことも当然であると言わねばならない。二は、通俗性に対する考え方

の相異である。談林の俳諧は、「くつろぎ」などという、生ぬるいものでは満足できないほどの自由さ・奔放さを希求したのであって、そこではこの語に対する顧慮がなくなったのも当然の帰結であろう。蕉門で再びこの語がとりあげられるのは、前記の二つのことがらに対する再評価がなされたからであると考えられる。

(注6) 頼原退蔵氏「軽みの真義」

(注7) 「其後(元禄六年)、三月尽の日より卯月の三四日まで予が宅に入て逗留し玉ふ。昼夜俳談をきく。其時翁ノ云、明日衣更也。句あるべし。きかむ、といへり。かしこまって、三四句吐出しといへ共、師の本意に叶はず」とあつて、本文に引用した箇所が続いている。

(注8) この書簡は『笈日記』にはほそのままの形で引用されている。さらに、『笈日記』によるところが多い『三冊子』にも、この逸話が引かれているのであるが、「句量尤もいミじければ」の部分には落ちている。その理由がいかなるものであったかは不明である。また、許六は『篇突』において、「一声の」の方をよしとし、「水の上」は、俗のよろこぶいろへ結び、であると言っている。これには二つの理由が考えられる。一は沾徳に対抗意識であり、他は「軽み」に対する許六の見解である。これについても、別の機会にゆずりたい。

(注9) 「一、段々句のすがた重く利(理)にはまり、六ヶ敷句の道理入ほがに罷成候へば、皆只今迄の句体打捨、軽くやすらかに不断の言葉にて致べし」

(注10) 「翁今思ふ体は、浅き砂川を見るごとく、句の形・付心ともに軽きなり。其所に至りて意味あり、と侍る。」(別座舖序)。

「翁曰、当時ノ俳諧ハ梨子地ノ器ニ高時絵カキタルガゴトシ。テイネイ美ツクセリト雖モ、ヤウヤク飽之。予門人ハ桐ノ器ヲカキ合ニヌリタランガ如ク、ザングリト荒ビテ句作スベシ。(中略)鴻雁の羹ヲステ、芳草ノ汁ヲス、レ。」(不玉宛去来論書)

(南山大学助教授)